

新春所感

—我が民族の宗教心—



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れ晴れと希望に満ちた新年をお迎えになつたこととお慶び申し上げます。

私は鳥取大学を定年退官後、日野路の日野病院に名誉病院長として赴任してから、早くも15度目の新春を迎えました。今年も日野病院の更なる発展と地域医療の活性化に貢献できたら幸いと考えていますので、よろしく願い申し上げます。

新年早々講釈でもありませんが、我々日本人は不思議な民族であると言われていています。大和民族の大和という言葉は、天理市付近の地名山廻(やまと)が起源で、元明天皇の時代に国名に二字を用いることが定められ、「倭」に通じる「和」の字に「大」の字を冠してできたとされています。しかし、日本の古代、大和民族の成立にユダヤ教、キリスト教が深く係わっていたのではないかと主張する人の話では、大和はヘブル語では「神の民」という意味なので、後から漢字が入ってきて、その発音に当てはめたものではないかと推測しています。

よく似た事例では、昔はヘブル語でエルサレム宮殿のことをシオンといいましたが、京都の祇園はこのシオンからきたと言われていています。また、イエスの時代はヘブル語から少し変形したアラム語が使われていましたが、アラム語ではイエス・キリストのことをウッシュ・マサと言いました。古くはウツマサと言われていた京都の太秦(うづまさ)は漢字は当て字ですが、この言葉に通じるようで、古代の日本にはユダヤ人が深く係わっていたと考えるのが自然のようです。

今日聖徳太子は、日本に仏教を伝えた人であったと言われてっていますが、梅原元京大教授は自書の中で、法隆寺建立の本当の目的は、仏教を擁護し広めていった蘇我氏に惨殺された聖徳太子と、その一族の怨霊を静めるために建立したと主張しておられます。太子は仏教の擁護者でなく、その対象にあったとの主張ですが、聖徳太子時代の建立である太秦の広隆寺は何を物語っているのでしょうか。

ともあれ、不思議な民族としての日本人は、ふだんは神仏を意識しませんが、現代にあつては、少なくとも盆とクリスマスと正月だけはうまく神様、仏様を使いわけ年中行事をこなしています。

今年家内と出かけた出雲大社の初詣では、神様も処理に困られるほどの種々のお願いをさせていただきました。その際、“吉”のおみくじを引きました。まだまだ努力すれば、栄えてゆく運勢とのことで安堵はいたしました。色情は憤めの一項目が妙に気にかかっています。私には縁のない話ですが、出雲の神様には大いに関心がおありのようです。



A. Tamai

(カットは玉井嗣彦名誉病院長)